
スノーラブソディ

梶原ちな

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

スノーラブソディ

【Nコード】

N1628C

【作者名】

梶原ちな

【あらすじ】

あたしが無言無口のおとなしい子なら、彼は先生に恋する不良生徒だった。いとおいしい静寂を壊すのは、彼？それとも。

(前書き)

企画「場所小説」参加作品です。

テーマは授業中の教室となっています。

キーワードから企画参加されている方々の作品を読むことが出来ますので、ご利用いただければ幸いです。

声にしてまで、つたえたいものなんてない。

黒板の上で削れるチョークと、小さなざわめき。

先生の高すぎるくらいの声さえなければ、授業中の教室ほどいいとおしいものはない。

初夏の、まだわずかに涼しい風が窓際の席に座るあたしの髪を揺らして遊ぶ。

お昼過ぎの授業は、けだるさと眠気をとまって、よりいっそうの静寂を生み出してくれた。

前を向いて、教科書を開いて。

ノートに鉛を擦りつけていく。

必要なのはそれだけ。

自分の意志を伝えるために必要なものが言語ならば、あたしはそれを不必要だと判断していた。

言葉が足りないとか、無口とか、おとなしいとか、あたしのこのクラスでの設定はそんなものだろう。

それで、充分だった。

しかし。

「じゃあ、川本さん。お願いね」
「……はい」

これさえなければ。

あたしが唯一声を発しなければならないのは、この現代文の授業だ。

何を気に入られてか、はたまた何の策略、陰謀か。

毎時間、教科書を数ページ読むのが役割になってしまっていた。たんに、まったく話さない無口な生徒の見せ場を作ってやるうとした、お優しい先生のお考えなのだろうけれど。

椅子を引けば、乾いた音が静かな教室に響いた。

指定されたページに目を落として、軽く口を開いて小さく息を吸った。

吐き出す瞬間。

わずかに出た声は、それよりももっと乱暴で大きな音にかき消されてしまった。

「うーっす。……あれ、何でセンセがいるんだよ？ 今、現文？」

黒板の反対側。

教室の奥の扉を足で開けた彼は、心底驚いたらしくその動きを止めていた。

「授業変更になったの。ほら、早く席につきなさい」
「マジかよ。知らなかった」

短い、茶色すぎる頭を掻きむしって教室に入った彼は、読むタイミングを失って立ちつくすあたしを目でとらえた。その口もとがわずかに緩んだのは、きつと見間違いだらう。

だって、彼とあたしにはまるで接点がなかった。

席が前と後ろだという、些細なこと以外は。

「やっぱりね」

「うんうん、さすがだよな」

小さなざわめきは彼の登場でいまや騒音となりつつあった。数名が顔を見合わせて、笑っているのがいやでも目に入る。

「現文だけは、必ず出るよね。やっぱりあれってホントなの？」

小さいけれど、はっきり聞こえる声。

あの声たちの言いたいことを、あたしは知っている。

あたしがこの教室で無口無言、おとなしい子という設定ならば。彼は、現文の先生に恋する不良生徒という設定だった。

遅刻早退無断欠席はいつものことで、生徒指導室にひっきりなしにお呼ばれされている彼は、なぜかこの現代文の授業だけ遅刻もせず真面目に受けていた。

一部では有名な話だ。

彼は現代文の先生に恋をしているから、この授業にだけは参加しているのだと。

恋する不良生徒は、ほぼ空席であるあたしの前の席に腰を下ろし

た。

再び小さくなったささやきが耳をくすぐる中、彼はそんなことを物ともせず教科書を開く。

茶色い短髪が動くたびに揺れる。

教科書を読むタイミングをすっかり見失ってしまったあたしは、見慣れた後姿を見て小さく息を吐いた。

いつも、教科書を読むたびに彼の後姿が目に入った。

それはあたしの中ですっかり見慣れた景色となっていた。

他の授業なんてまともに出たことがなくせに、恋とはそこまでひとを駆り立てるものなのだろうか。

「じゃあ、川本さん」

そんなことを考えているうちに名前を呼ばれて、教科書に視線を戻した。

興味もない文字の羅列を読み上げるために、また小さく口を開いて。

「はい、ありがとう。次は」

自分の職務を全うして、ようやく席につくことができた。

さっきのざわめきはもうすっかりおさまって、これでようやくいとおしい静寂がおとずれる、はずだったのに。

「助かった、間に合って」

おとずれかけた静寂を破ったのは、ざわめきよりもささやきよりも小さな彼の声。

わずかに空気を揺らしたその声に、あたしは反応することなく聞かなかつた振りをした。

どうやら、彼が恋する不良少年という設定はあながち間違いでもないらしい。

そんなにあの先生が好きならそれなりの行動を取ればいいのに。

そんなことを思いながら、黒板に視線を向ければ。

目に入ったのは黒板の切れ端と、なぜかこちら向いた彼の顔だった。

「なあ、何でしゃべんねえの？ せつかくいい声してんのに」

静寂を壊す、彼の声。

それは、あたしに向けられている。

「俺、お前の朗読聞いていると落ち着くんだわ。後ろからきれいな雪が降ってくるみたいなのがしてさ」

シャーペンが、かろうじて指に引っかかっていた。

このひとは、何を言っているのだろう。

朗読？ 声？ 雪？

「間に合ってよかった。マジで。損するところだった」

んじゃ、と彼はいいたいことをいって前に向き直ってしまった。

残されたあたしは、現状を理解するのに時間が必要だった。

どうやら彼はあたしの声をほめてくれたらしい。
雪にたとえて。

どうやら彼は安心したらしい。
あたしの声を聞くことができたから。

「……っ」

上りつめていくものが、頬を染めていく。

初夏の風は涼しいけれど、そんなのはまったくもって無意味だった。

つま先から、頭のとっぺんまでおかしな音がする。
それが静寂に包まれたとおしい時間を壊していく。

手に汗をかいている。

今、教科書はどの辺りまですすんだのだろう。
耳障りな高い声が不思議なくらい頭に入ってこない。

それよりもいまは、別のことが頭に浮かんで離れない。

シャーペンを置いた指先が音もなく動き出す。
ふるえているのは、夏の風のせいじゃない。

声にしてまで、つたえたいものなんてなかった。
だって話すのはメンドウでおっくうだったから。

だけど、いま。

教科書を読むときみたいに口が勝手に息を吸い込む。

いとおいしい静寂が、壊れる瞬間。

「ん？」

指が見慣れた背中を突いていた。

ふたたび、振り向いた彼の顔。

頭の中をしめるこの言葉を吐き出さなきゃ、いつまでも静寂はおとずれない。

「あ、りがと」

そうして、あたしは暑いくらいの教室で、静かに雪を降らせたのだった。

(後書き)

読んでくださってありがとうございます。

初企画参加作品のため、いつもより微糖です。
書き上げるのも時間がかかってしまいました。
コメントいただければ、とてもうれしいです。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1628c/>

スノーラブソディ

2009年3月24日09時23分発行